

禄の女装束

生^{なま}江^え麻里子

平安時代、貴族や天皇は、朝廷での儀式のうちに、あるいは貴族の邸宅で催される宴のなかで、あるいは良い知らせを運んできた使者に、また天皇の使として地方へ旅立つ官人にと、様々な場面で、禄すなわち祝儀として衣服や布地を贈った。

そのように贈られた禄のなかで、本論では特に衣服について検討を行った。禄となった衣服の種類はさまざまだったが、そのなかに、「女装束」と呼ばれたものがある。それは貴族階級女性の正装だった「唐衣」「裳」「袴」「褂」などの衣服ひと揃いをいうのだが、貴族の日記である古記録を探せば、その「女装束」が男性に贈られた例が数多くみられる。

本論は、謝意や労いを表す禄であるのに、それを授けられた本人が着るはずのない女物の衣服をなぜ贈るのか、という疑問を出発点として、禄の「女装束」のうち、特に男性に対してそれが贈られた例を通して、この禄の性質について追究し、また「女装束」に限らず禄として贈られた衣服全般の性質に迫ろうと試みたものである。

禄としての「女装束」は、九世紀から鎌倉時代以降にいたるまで、古記録等に数百例登場する。そこで「女装束」が登場する史料をできる限り集めた上で、行事の種類によって分類し、大きく「子供の成長儀礼」「女性の慶事」「男性主催の行事」「地方赴任」とわけて、そのそれぞれについて論じた。

まず第一章「子供の成長儀礼の禄」では、もっとも多くみられる「女装束」の例として、子供の成長儀礼を扱った。そのなかでも特に、誕生祝いの儀礼である「産養（うぶやしなひ）」において、参会者（上達部・殿上人）等に贈られる禄を中心に検証した。

親王の産養の記録からは、「女装束」が、禄の衣服類のなかでも身分の高い者に与えられる品だったことがわかる。また、同じ参会者に対して禄を贈っていても、天皇と中宮とでは品目が異なり、「女装束」は中宮のほうだけが贈っている、ということに注目し、「女装束」というのは、女性から贈られる禄である、という可能性を指摘した。

またさらに、出産時には白い衣服や調度を用いる習いがあった平安時代に、産養において白い「女装束」が賜与される例から、その「女装束」が産婦を象徴するものとして、産婦から賜与されていたと考えられることを指摘した。

さらに、中宮からの禄に、あきらかに参会者が着るわけではない「皇子御衣」「御襦袢」（そのとき誕生した親王の衣服が添えられていることから、禄の衣服というものが、相手がそれを着ることを前提に贈られるとは限らないことを指摘し、むしろ贈り手の属性（性別・身分）によって禄の種類が左右されていることを指摘した。

つまり、受け取り手の性別・年齢等に関わらず、贈り手の属性によってその品目が決められるのが、禄の衣服の根本的な特質なのではないかということであり、そう考えれば、禄の「女装束」とは、唐衣・裳・袴といった衣服を身に着けるような、身分の高い女性から贈られる禄である、と考えることができる。

そのほか、五十日（いか）、百日（ももか）、着袴、元服などの成長儀礼についても同様に、禄の「女装束」は高貴な女性が賜与する禄であった、あるいはそう推定できることを示した。

第二章「女性の慶事の禄」では、女性の許へ、めでたい用件を伝えるに來た使者にたいして贈られる禄としての「女装束」を扱った。これには婚儀・立后・叙位を取り上げた。

高貴な女性の婚儀にさいしては、花婿からの文や贈り物を届ける使者を務める人々に、禄の「女装束」が贈られることになっており、その贈り手は、婚儀の当事者たる女性であった。立后についても、女御など当事者の女性が、天皇からの勅使へ「女装束」を賜与している。また、女性に対する叙位が行なわれ、その位記を持つてくる使者があるとき、その使者に対しても「女装束」が贈られた。これも女性から賜与される禄であろう。使者に「女装束」を授ける例は、勅使への禄に集中しているため、「女装束」は重大な場面でのみ賜与されるような、高級な禄であったということがわかる。

第一・二章では、女性が明らかに中心的当事者である行事において、賜与された禄の「女装束」は、高貴な女性^が、他者に贈ったものであることを明らかにした。この「女装束」の性質から、禄の衣服の本質とは、贈り主自身の衣服や、それと同種のもの（例えば新調した品）を他者に贈ることにある、ということができる。

こうした、禄の基本的な性質が明らかになったところで、第三章「男性主権行事の禄」では、男性が主権する行事における、禄の「女装束」について、贈り主を検討した。ここまでの分析を踏まえれば、「女装束」の贈り主は必ず女性であるはずである。

まず、上皇主権の行事で下賜するために、上皇の妻が禄の「女装束」を用意している事例から、男性が主権する行事のなかで「女装束」が贈られる場合も、その贈り主は女性であると考えた。

さらに、禄の「女装束」が登場する男性主権の饗宴の代表例として大臣大饗を取り上げ、大臣大饗において「女装束」を禄として賜うことは、そ

の行事そのものの成立後、かなり早い段階から（あるいは最初から）行なわれていたことを確認した上で、この「女装束」の贈り主が明記された史料は見つけられなかったものの、この禄が大臣家の女性、おそらくは大臣の妻から、大饗の参会者へ賜与された禄であろうことを示した。

大臣大饗の禄については従来、太政官の上下関係の構築と再確認のために、演出効果、裏打ちとして、大臣の「身の代」としての衣服を受け取る仕組みになっていたのだ、と指摘されてきたが、それでは品目が「女装束」であることを説明できないと考える。

大臣の妻が、夫が上司・同僚・下僚を招いて自邸で開く饗宴に、裏方以上の積極的な意味を持つて関与していたのだとすれば、平安時代の夫婦のありかたについて、今までは異なった視点から解明することができなかったのではないだろうか。

近衛大將が自邸で催す大將饗についても同様の結論を得た。古記録からは残念ながら、大將饗に大將の妻がどのように関わっていたのか、なかなか読みとれないので、『宇津保物語』の描写を参考にして、禄の製作が夫婦の共同作業だったようすを指摘し、こうした饗宴では夫婦がともに客をもてなし、禄が「女装束」である場合には、それは妻が客人に贈った禄だったのでないかと指摘した。

次に第四章「地方赴任にあたって」ではまず、旅に出る人へ餞別として贈られる禄の「女装束」として、国司と宇佐使の場合を取り上げた。彼らが任国等へ赴任していくとき、天皇はもとより、よく知る人々の邸や、大臣などの邸を訪れて別れの挨拶をした。それを「罷申（まかりもうし）」といったが、そのとき、赴任していく人に対して、都に残る人から餞別が贈られる。そうして贈られる品のなかのひとつに、「女装束」があった。

この事例を検討し、同じ人物が受け取り手であっても、贈り主が男性のときは束帯を、女性のときは「女装束」というように、禄には贈与者そ

れぞれの性別・立場に基づいた衣服が選択されていることを確かめ、錢別の「女装束」もまた、高貴な女性からの禄であったと結論づけた。

さらに、地方へ勅使が赴くとき、下向先で下賜する禄として「女装束」を準備し持つていく習いがあったことについて検討した。伊勢公卿勅使と宇佐使とを取り上げ、かれらが路次の供給への返礼として国司に「女装束」を賜り、また下向先の神社で「女装束」を下賜していたことを確認した。この禄の意義については、勅使の妻あるいは天皇の妻からのものであるという仮説を立てたものの、それ以上の検討はできなかった。今後の課題としたい。

本論では、男性に贈られる禄の「女装束」の検討を通して、贈り主自身の衣服を他者に贈るという点が、禄の衣服の根本的な性格のひとつなのではないかということ明らかにした。禄は新調された衣服であることもあるが、自分の衣服を人に分け与えるという習わしが根底にあり、新調した衣服を賜与する場合にあっても、やはり自分の衣服を分け与えているのだという意識が通底していたのではないかと思う。禄の衣服とは、相手がそれを着ることを前提に贈られるものではなく、贈り手の衣服を相手に分け与えることに意義があるものだったということが、男性に贈られる禄の「女装束」を通して明瞭に見えてくる。

こうした禄の性質を考慮すれば、儀式・行事において贈られる禄のなかで、これまで贈与主体が不明といわれてきたケースについても、解明の手掛かりを掴めるのではないだろうか。また、これまで禄の贈り主＝儀式の主催者と考えられてきたケースについても、再考の余地があるのではなからうかと考える。

今後は、大饗での禄や供給への返礼の禄など、検証が不十分な部分をさらに深め、「女装束」以外の衣服の禄も広く検討し、禄の衣服類の性質をより明瞭にしたい。そしてそれを物差しとして、平安時代の社会構造を新

たな視点で捉え直したいと考えている。